『虞美人草』クレオパトラのピュアな雨

Junko Higasa

夏目漱石作『虞美人草』には様々な雨が降る。桓武天皇から北条氏に至る日本の歴史に降る桜の雨。マクベスの不遜と不安に付きまとう雷鳴と稲妻と血の雨。ハムレットの心に降る嘆きの雨。だが最も重要な意味を持つ雨は、いつでも藤尾と共にある「愛の雨」である。ウイリアム・シェイクスピア作『Antony and Cleopatra（アントニーとクレオパトラ）』にアントニーと臣下：イノバーバスの以下のような会話がある。

ANTONY） She is cunning past man's thought.

ENOBARBUS） Alack, sir, no; her passions are made of nothing but the finest part of pure love: we cannot call her winds and waters sighs and tears; they are greater storms and tempests than almanacs can report: this cannot be cunning in her; if it be, she makes a shower of rain as well as Jove.

ANTONY） Would I had never seen her.

「彼女の狡猾さは男の想像を絶する」「ですが；その情熱は純愛以外の何物でもありません：彼女の風雨のため息と涙は予想がつきません；暦に記すことが出来ない暴風雨と嵐です：狡猾さで出来ることではありません；もしできたら、彼女はゼウスのように雨を作り出せます」「彼女に会わなければよかった」

この「彼女」とはクレオパトラの事である。彼女の雨は純粋な愛から生まれるが、時には予想もつかない嵐となる。その雨はクレオパトラ―藤尾の心の中に降る予測不可能な揺らぎの雨である。クレオパトラと臣下：チャーミアンのこんな会話がある。

CLEOPATRA） See where he is,who's with him,what he does: I did not send you: if you find him sad, Say I am dancing; if in mirth, report That I am sudden sick: quick,and return. **CHARMIAN）** Madam, methinks, if you did love him dearly, You do not hold the method to enforce the like from him.

CLEOPATRA） What should I do, I do not? **CHARMIAN）** In each thing give him way, cross him nothing.

CLEOPATRA） Thou teachest like a fool; the way to lose him. **CHARMIAN）** Tempt him not so too far; I wish, forbear: In time we hate that which we often fear.

「彼がどこで誰と何をしているか見ておいで：私の遣いだって言わずに：彼が悲しそうだったら、私は踊っているって言うのよ、愉快そうだったら、私が急病だと云いなさい：さっさと行ってすぐ戻っておいで」「奥様、あの方を心底愛しておいでなら、わざと気を引くようなやり方はどうかと存じますが」「ではどうすればいいの？」「何事も思う通りにさせるのです、邪魔せずに」「バカげた案だこと；彼を失ってしまうわ」「あまりあの方の気を引こうとなさいませんように；どうかご辛抱を：干渉しすぎるとやがて嫌われます」

上記のように失うまいとして束縛する愛。男は疲れて遠のいてしまう。藤尾は女としての愛を持つゆえに、プライドに隠されたピュアな愛を持つゆえに男を手放すまいとして揺れた。彼女のため息が風になる、雨になる。彼女自身にも予測がつかない心の嵐になる。ピュア即ち白。その雨が『虞美人草』に降り続いた。「女の性」という女自身にも予測不可能な雨は、その命が果てるまで降り止むことはない。（2013.10.15）